

#### 4 鹿児島県串良町「住民活動による公共サービスの提供」

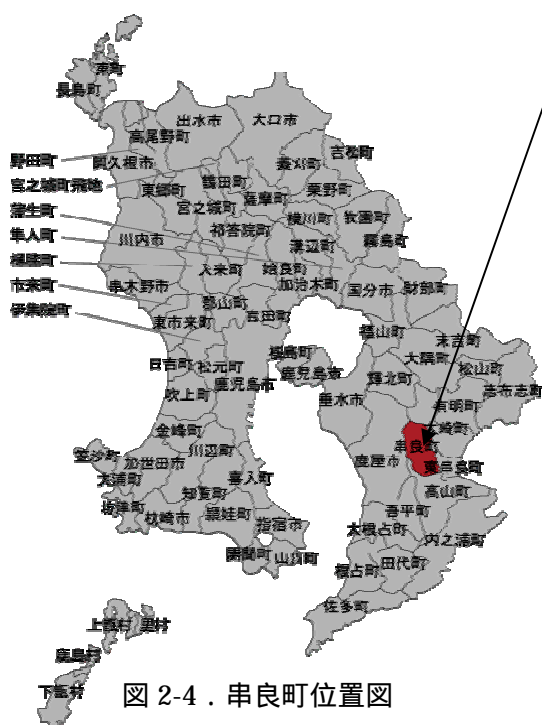


図 2-4 . 串良町位置図

#### 地域の概況（串良町）

総面積	6,586ha
林野面積	1,893ha
林野率	28.7%
人工林率	73.9%
耕地面積	2,950ha
耕地面積率	44.8%
	田( 585ha) 畑(2,360ha)
総人口	13,613 人
高齢人口	3,364 人
高齢化率	24.7%
1次産業就業者数	2,135 人

出典：2000 年国勢調査

2000 年世界農林センサス

#### 1 . 地域の概況

鹿児島県の南東に位置する串良町は、大隈半島のほぼ中央に位置し、東は東串良町、西は鹿屋市、南は高山町、東北は曾於郡大崎町に接し、東西に狭く南北に長い地形をしている。交通は、東西を走る国道 220 号線と鹿屋市と都城市に通じる国道 269 号線を基幹とし、九州縦貫自動車道加治木インター、宮崎自動車道都城インターまでそれぞれ 80 分、鹿児島市まで垂水フェリー経由し約 100 分の位置にある。総面積 65.86 k m<sup>2</sup>で、平坦な地形に特徴があり、全野が黒色火山灰土壌とシラスで、河川は東端を串良川、南部を肝属川、ほぼ中央から南へ甫木川、西部を中山川が流れ、水に恵まれた地域である。気象条件は温暖多雨に特徴があり、平均気温 16.9 、年間降雨量 2,500mm 前後で、台風の常襲地帯である。

このような風土を活かし、古くから農業が盛んであり、特に全国 2 位の飼養頭数を誇る畜産業と園芸を中心に、農業や水を活かしたウナギの養殖など、特色のある産業が形成されてきた。

串良町は、1932 年 5 月に町制を施行し現在に至っているが、古くは大隈風土記に「大隈の郡、串トの郷は昔、国造りの神がこの村のありさまを見るために出された使いが帰ってきて、髪梳の神がありましたと申し上げたので神はその村を髪梳きの村と言うように仰せ

られ、隼人のことば久西良の郷というようになり、また改めて串トの郷と言う」と書かれているように、古くから開けた地域であった。

現在の串良町は、人口は 13,472 名（2004 年 8 月 1 日現在）とやや減少傾向で、高齢化率 27.4%と、高齢化が進んでいる状況である。農業の粗生産額の推移を見ると、平成 8 年度 217 億 1,600 万円から、平成 12 年度 170 億 800 万円、平成 15 年度 183 億 3,500 万円とやや増減はあるが、他の地域の現状に比較すると比較的順調に推移していると思われる。

串良町の財政は、大半の農家が零細規模で所得も低いことから、平成 11 年度の歳入のうち町税は 16.1%で財源の大部分を交付金や国県支出金等に依存している。そのため、地域の自治を促進する制度を定め、1995 年から自治公民館の取り組みとして、自主的な活動が育つようはかってきた。串良町 85 地区の人々が自ら、自分たちの課題を解決する仕組みである。



写真 2-26 串良町の圃場

## 2. 取り組みの内容

串良町、柳谷自治公民館の取り組みの調査をおこなった。

柳谷集落は、1700年代に平家の落人が高山町柳の谷から移り住んだことを起源に開かれた地域である。現在、130戸287名（平成16年）が居住する農村集落であるが、他の地域に比較して高齢化（現在高齢化率34%）が進み、それともなう遊休耕地の拡大が10年以上前から問題となっていた。



写真 2-27 柳谷自治公民館拠点「やねだん未来館」

東京の金融機関で働いていた豊重哲郎氏は、地元で U ターンし 1996 年自治公民館館長に就任した。通常、自治会長は 1 年毎の交代制度であるが、地域の長老から 10 年間の任期で、この町の課題を解決し良くしてもらいたいと依頼を受け自治会長に就任した。

豊重氏のリーダーシップの下、次のような取り組みがおこなわれている。

地域自治活動の一環として、遊休耕地を住民総出で耕作し、サツマイモを植え付け、焼酎を生産・販売するなどして収益を上げ、地域課題の解決をはかっている。  
土着菌を利用した土質改良剤を生産し、畜産業者等に販売し利益を上げ、地域課題解

決資金として利用している。

土質改良剤と生ごみ処理機を集落全戸に配布し、植物残渣の堆肥化をはかっている。集落のコミュニティ拠点を整備し、手打ちそばを出す食堂および直販所として、多くの人々の受け入れを行なうとともに、地域コミュニティの拠点として活用をはかっている。

住民の知恵と汗によってもたらされた収益を利用し、介護・防犯などに対応した設備を整備し、地域の安全・安心の暮らしに役立てている。

「わくわく運動遊園」、「お宝歴史館」など、地域の助け合いによって活動の拠点を整備し、地域の活性化に役立てている。



写真 2-28 串良町柳谷 お宝歴史館

## 2 - 1 . 取り組み主体

取り組み主体は、串良町が 1995 年から制度化をおこなった「自治公民館制度」を母体に組み立てられている。自治公民館による地域の自治が実施されていたが、豊重館長によると「行政情報の回覧による伝達組織」としての機能でしかなく、地域の課題を解決するにも自治公民館に与えられる事務委託料、年間 44 万円では新しい活動を展開することが困難であった。そこで、豊重氏は新たな枠組みとして地域住民が自分たちで活動・事業化が可能な仕組みを創出し、事業をおこない、収益を別勘定（集落民会議という名称）で利用す

る仕組みを作り上げた。このような枠組みで、実際に事業を行なう際には、地域の住民の多く（一度に 100 名以上）が参加し、共同事業が実施されている。

この仕組みは、行政の制度を下敷きにしながら、独自のアイデアで作りに上げてきたところに独創性が認められる。

## 2 - 2 . 取り組みの経緯と概要

串良町、柳谷自治公民館の取り組みは、1996 年豊重哲郎氏が自治会長に就任したことに始まるが、9 年にわたる取り組みを時間の経過と共にふりかえってみる。



写真 2-29 直販所で販売される焼酎（やねだん）

1996 年、豊重氏が公民館長に就任したとき、柳谷集落の人口は子供の頃の 3 分の 2 に減少していた。同時に一人暮らしの老人が、22 名と高齢化が進んでいる状況であった。

豊重公民館長が最初に掲げた目標は、行政だよりの気持ちから脱し、自分たちが力を合わせて事業をおこない、達成感と感動を共有することであった。最初におこなった事業は、串良町行政が買い上げそのままになっていた澱粉工場の跡地、20 アールを借りて「わくわく運動遊園」を、集落総出で作りに上げることであった。それまで、草が生い茂り放置されていた土地を、集落の人々が力を合わせ、ゲートボール場兼多目的コート 2 面、高齢者や子供向けの遊具や藤棚などを、4 ヶ月かけて作り上げた。129 戸 330 名（当時）の集落民が集まり、丸太や角材、緑化樹などの資材を提供し合い、工事については集落内の大工や左

官、造園士が中心になって労働奉仕で作り上げた。業者に発注したのは、電気工事などごくわずかで、最終的には8万円の予算で1998年に出来上がった。

同時に、集落内にある遊休地1町歩を利用し、からいも(サツマイモ)を植え付け、収益を上げる事業に取り組んだ。これは、それまで放棄されていた圃場を、高齢者の方々と地域のボランティアをつのって、整備、畝たて、苗とり、堆肥散布、植え付け、除草、収穫までを集落の共同作業としておこなうものである。通常、このような労働奉仕は嫌われ、近年衰退している状況であるが、この地域では古くから続いてきた「結い」の心を復活するため、新しい仕組みで取り組んでいる。

この取り組みのユニークな点は、この活動で作られた「からいも」を澱粉工場に販売し、その収益を使い地域の課題解決を具体的にわかりやすい形で実現させるところである。初年度からおおよそ80~100万円の売上利益が発生し、そのお金を使ってさまざまな課題を解決してきた。例えば、初年度は一人暮らしの高齢者の世帯8軒に、「夜、もしもの時にベルがなり誰かが駆けつけるシステム」を、32万円の予算で設置した。また、煙感知器33台をお年寄りから優先的に設置するなど、暮らしの安心に直結する仕組みを、収益を利用し整備していった。このような、公民館長による現実的な資金計画を兼ね備えた、住民参加型の事業が地域の人々に「感動」を持って受け入れられ、さまざまな波及事業に発展してきている。このような、「からいも」からもたらされる収益によって次の新たな収益事業が生まれ、同時にその収益が集落の自治活動へ積極的に投入されている。



写真 2-30 土着菌による土質改良剤づくり

「わくわく運動遊園」の完成と「からいも」事業の収益による取り組みが、地域の人々の新たなまとまりと団結力をもたらすこととなった。2000年から研究を開始し、2001年から事業を開始したのが、土着菌の製造販売である。これは、近くの山の腐葉土の中などにいる糸状菌に、微生物と米ぬか、砂糖、水などを混ぜて攪拌し、約三週間かけて醗酵させタネを作る。鹿児島大学の研究では、これを床に敷いて活用しているが、ここでは集落内の養豚場の実践例を参考にして、飼料に2%入れて直接牛や豚に食べさせている。柳谷集落で2001年11月に、実際に利用した集落内の養豚家に実施したアンケートによると、33戸のうち、89%が「悪臭がしなくなった」と答え、「牛の下痢がなくなった」「畜舎のハエがいなくなった」との声も寄せられており、効果があるとの評価が高まっている。

この土着菌による改良剤は、キログラムあたり50円で集落内の人々には販売され、同時に集落外の人々には80円で販売され好評を博している。年間3万kg程度販売されており、200万円強の売上高となっている。このような新たな取り組みは、それまでの集落一丸の取り組みの成果として好循環を作り出し、集落の人々のつながりを強固にする役割を担っている。ここでも、土着菌の醗酵をおこない出荷を担う建物「土着菌センター」(広さ約100㎡)が、地域の住民の手づくりで作り上げられた。同時に、この事業に携わる6名の販売スタッフや重機を扱うオペレーターの仕事が新たに発生している。



写真 2-31 集落外からも土着菌資材を購入にやってくる

この土着菌によるタネは、集落内すべての世帯に堆肥づくりの容器と共に設置し、生ゴミの堆肥化（好気性発酵方式）をはかっている。同時に、この菌を利用し地力の落ちた土壌に散布し、地力回復をはかりそこにカライモを植えつける取り組みを実施している。散布後2年間で、ミミズが発生し地力の回復が可能であることを確認している。



写真 2-32 土着菌の出荷をおこなう重機オペレーター

土着菌を利用したカライモ栽培は、現在でも地域住民の参画ボランティアでおこなわれている。2003年度の柳谷自治公民館総会資料によると、5月16日にカライモ畑に土着菌を散布することからはじめ、5月25日と6月7日には植え付け、11月1日と23日に収穫を100名規模の参加で行なう等、延べ64回の共同作業がさまざまな企画事業により実施されている経緯が紹介されている。現在「からいも」は、澱粉販売用と焼酎仕込み用が生産されており、豊重館長によると2003年度には1,500本もの焼酎が、鹿屋市の神川酒造に製造販売を委託し造られ、2,100円の上代で販売された。次年度は、10,000本が生産される予定で、2,300円の上代で販売され、この焼酎によって600～700万円の収益が見込まれている。

このような、取り組み収益によってもたらされた集落の課題解決事業は、緊急警報装置の設置にはじまり、2003年には全戸に防犯ベルが設置されるなど、地域住民の「安全・安心」な暮らしを作るため、また「福祉」「教育」などの充実のために使われている。この資金を豊重館長は、将来的には公民館会費を全廃し、その上、地域の子供のために500万円



程度の育英基金を整備し、地域の外に出て行った子供たちにも地域とのつながりを持ってもらう仕組みに活かして行きたいとの考えを披露された。

現在、柳谷自治会の取り組みは他の地域の人々からも注目を浴び、年間 2,000 名程の視察を受け入れるようになってきている。現在までに、延べ 10,000 人程が視察をされたとの数字が残っている。このような多くの人々の注目を受け、2004 年 5 月には住民の共同による方式で、「ホンモノ未来館」という食堂と直販所を備えた地域の拠点を整備した。この建物の木材は、近くの山から伐り出し無償で提供された。測量・整地も住民の共同でおこない、8 ヶ月で整備された。124 m<sup>2</sup>の敷地に使われた資材は、ほとんどが無償で提供され、唯一屋根材のスレートのみを購入した。地域の皆が常に出番をまっており、このような共同作業に積極的に参加する結果がこの建物として出来上がった。初年度この施設では、時給 400 円の給与で地域の主婦 8 名を雇用し営業を開始した。ここで出される食事は、蕎麦を中心に地元の米・野菜を使い、特に土着菌を利用した生産物を積極的に利用し、串良町の料理研究家と地元の主婦 5 名が 50 日間にわたり研究開発したメニューを提供している。特に「やねだん旬の御膳」1,000 円というメニューを核に、1,000 万円の売上を目標においている。



写真 2-33 地域のコミュニティー拠点となる食堂「ホンモノ未来館」

今後この施設を拠点に、焼酎や新しい特産物を開発し、インターネットで販売していくことを考えているようだ。特に、施設の前にある小山を利用し、トンネルを掘って空冷の

倉庫をつくり、根ものを中心に販売していくことを検討中である。自然薯や芋を中心に、地域にあった産物の開発をはかろうとしている。そのため、公民館組織による農地利用を可能にするため法人化を視野に入れ、例えば「地縁による団体」の申請の準備をはかっている。

### 2 - 3 . 取り組みの効果と成功要因

集落の共同作業によって始まった小さな取り組みは、収益を地域の公益事業に目に見える形で反映させることにより、地域住民のさらなる連帯感が作り上げられ、さまざまな地域の元気を作り出すこととなった。

特に暮らしの安心という点で、防犯体制の整備を住民が内発的に取り組み、例えば60人いる高校生以下の学生に対し、通学路に住民が出て「おはよう」と挨拶をする「おはよう声かけ週間」を設定し、地域の住民が通学路に立って送り出す仕組みをつくることや、自主防災班を組織するなど、多くの取り組みとなって波及効果が生まれている。同時に、このような取り組みが、地域外の人々の注目を浴び、ベトナムや韓国からも視察団を受け入れ、結果的に地域の人々が積極的に道路掃除をするなど、集落が美しくなりはじめた。

土着菌の利用についても、さまざまな副次効果を生んでおり、集落全戸に配布した堆肥化の設備により、この集落全戸から生ごみの収集がなくなった。生ゴミステーションの悪臭が大きな課題であったが、土着菌の利用によって解決がはかられた。同時に、地域外の畜産農家や行政から土着菌の畜産業利用手法が注目され、隣町の東串良町でも取り組みが始まるなど、拡大が期待されている。同時に土着菌の活用によって、地域の循環型の有機農業の環を作り上げることにも期待が集まっている。カライモの活用による焼酎生産や、食堂を利用した土着菌利用農産物の開発など、新たな展開の拡大が期待されている。豊重館長は、土着菌利用商品のブランド化も視野に入れ、計画を作り上げようとしている。

9年間の取り組みの成果として、公民館の総会に集落のほとんど(90%以上の出席率)の人々が参加して、議事がおこなわれるようになった。すべての事業はここで、目的や資金面などすべての情報を明らかにし、この総会で決定されることとなっており、自発的な連帯感がそこで形成されている。すなわち、地域のコミュニティーの結束が、事業の計画・承認・実施の連帯によって、強固な形で作りあげられている。

豊重館長は、10年間の任期で公民館長を引き受けたのだが、後継者の育成についても力を注いできた。自分のブレーンやパートナーを大切にし、育てていくことが後継者育成につながる。すなわち、常に自分が中心ではなく、でしゃばらないで事業を住民参加でやってきたことによって、まわりのスタッフが育ってきたと豊重氏はふりかえられた。同時に、

すべての情報を共有し、地域の人々に開かれた仕組みづくりをおこなったことも重要な点だと考えられる。「補助金に頼らない地域おこし」には、持続性をどのように作り上げていくかの視点が重要である。ここでは、わかりやすい成果を示し、住民一人一人に出番を作り、参加の実感を与えることに最も注意をはらっている。例えば高齢者には、長年培ってきた農業技術などを地域のために使っていただく場を提供するなど、皆が参加できる事業を用意している。参加し大きな成果が得られた時、「感動」が生まれ次のエネルギーとなる。「生きた福祉と感動の地域おこし」と豊重館長は表現している。この表現の背景には、「人間愛の村をつくる」という強い信念を持ったリーダーとしての豊重氏の存在がある。リーダーの情熱が基本にあり、自分から動き、自主参加を基本に計画を実行する。「自治公民館による農業を中心にして村づくりができるはず」という強い信念と、緻密な戦略性がこの村に成功をもたらした。

豊重館長は、「この地に住んでいて良かった」ではだめで、これからは「この地に住んでみたい」という、特に文化向上の取り組みが重要だと述べられた。ただ、事業を実施しているだけでは人口は増えない時代であり、その地域の魅力を教育・文化の面で高めていく努力を今後進めていく必要があるとの認識である。



写真 2-34 柳谷自治公民館に掲げられた横断幕